

ラ・ボエーム News

記者会見レポート!



撮影＝飯島 隆

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

2022 7/15(金) 16(土) 17(日) 18(月・祝) 20(水) 21(木) 23(土) 24(日) [全8公演] 各日 2:00PM 開演

2022年の佐渡裕芸術監督プロデュースオペラは「ラ・ボエーム」。チケット発売に先駆け、2月下旬にKOBELCO大ホールの舞台上で記者会見が開催されました。前回の記者会見後に新型コロナウイルス感染拡大により公演は中止された今公演は、2年の時を経て、待望の上演となります。今回の記者会見では、佐渡裕芸術監督とスポーツ・文化評論家の玉木正之さんに対談形式で、「ラ・ボエーム」の魅力を深堀りしていただきました。

プロデュースオペラの“あり方”が出来てきた

玉木 佐渡さんとは1990年代前半に札幌のパシフィック・ミュージック・フェスティバルで初めてお会いして、その後、兵庫のオープニング前年のプレ・コンサートに語り役で呼んでいただきましたね。その後、プロデュースオペラが始まって。もう次で17回目?

佐渡 そうですね。

玉木 2005年と昨年以外は全て観ていますが、こんなにオペラを身近に感じられる兵庫の皆さんが羨ましくて仕方ないです。どうしても敷居が高いと感じることが多いオペラですが、兵庫のお客様はそうはならなかったですね。

佐渡 初年度に「ヘンゼルとグレーテル」を子供向けに作り、夏に上演するオペラは翌2006年の「蝶々夫人」からでしたが、お客様の大半がオペラ初心者でした。ここ兵庫のプロデュースオペラのあり方というものが17年の間に出来てきたと感じます。

玉木 “ここのオペラのあり方”というのは素晴らしい表現です。私が一番驚いたのは、「蝶々夫人」を観たときに、3幕になったら、皆さんハンカチを出して、半分くらいの方が涙を流されているんです。東京ではあまり見たことがない光景で、私はそれに感激してしまいました。お客様の反応が素晴らしいですよ。

佐渡 やっぱり宝塚などがあって、劇場に足を運ぶという文化が阪神間には元々あったのかなと思います。

「蝶々夫人」は決して舞台装置が豪華なわけでもなく、今回の「ラ・ボエーム」もしかりですが、やはり音楽が圧倒的に素晴らしいんです。昨年は宝塚やお笑いの要素を入れて、兵庫でしか作れない「メリー・ウイドウ」を作りました。そして、今回のブッチーニは大編成のオーケストラで…ってもう本題に入りますが(笑)。

玉木 どうぞどうぞ。

佐渡 ブッチーニっていうのは凄いなと思います。「ラ・ボエーム」の1幕は青春の真ただ中で恋に落ちていく二人、2幕はクリスマスのカルチェ・ラタンの賑やかなシーン、これらも素晴らしい